

戸惑いの花嫁 スピンオフ～康生×和紗～サンプル

「もう……いきたいです……」

最後にペニスでの射精を許されたのは一体いつだったのだろうか。いや、射精はおろか、勃起だって最後にしたのがいつだったのか、ざっくり二か月くらい前、ということしかもう覚えていない。

康生は無言のまま、剥き出しの——貞操帯だけを身につけた——和紗の身体を見つめた。

「……康生くん……」

康生との出会いは五年前。「あなたの願いを叶えます。」という特殊性癖を扱う専門店でペアになったことで知り合った。年下である康生は時に可愛く、でも頼りがいもあって、優しくてかつこよくて男らしくて。和紗が甘えてもぐずっても拗ねても「仕方ないですね」と言っただけで甘やかしてくれる人。

「——分かりました。では、ローションをもらってきてください」

「っ……」

ローションをもらってくる——それは、普通の「ローション」ではない。でもそれさえできればペニスを弄ることができる。

「は、いっ！」

本当は今すぐにも飛び出したかった。けれどいくら限界だからってそんなことはできなくて。床に四つん這いになり、アナルを掲げて準備を待つ。

「入れてください……」

カタン、ペリ——康生が「ローションをもらうための準備」を始めた音が胸に響く。

(ああ……)

もう期待でペニスに激痛が走っている。早く勃起したい。たくさん擦って、気持ち良く射精がしたい。

「入れますよ」

「はい……お願いしま……ああああ！」

何度されても快感を無視することのできない挿入。でも入ってきたのは大好きな康生のペニスではなく、空気を注入することで膨らむデイルドだ。それにコンドームをつけたものが、アナルの奥に入ってくる。

「あっ……くっ……」

康生のペニスほどではないにしろ、それはやはりいきなり受け入れるには大きくて。でも康生がこの身体を傷付けることは絶対にないと分かっているから、挿入に協力するためにもゆっくりと深く息を吐く。

「……真っ赤になってる……」

康生の独り言。でも、ペニスを痛め付けるには十分な台詞。

「っ……………いた……………い……………」

ズクンズクンと鈍く痛むペニス。このまま貞操帯の金属が食い込み続け、ペニスを裂いてしまうのではないかと思うほどの苦しみ。

「ああ……………痛いっ……………」

ペニスが裂けるなんて、そんなこと文字で見ただけでも怖いことなのに、なぜかペニスはさらに膨らもうと欲張った。

「あああっ！」

アナルの奥深いところまで玩具が挿入された。普段康生を受け入れるところより、少しだけ手前。康生はこんなことをさせるくせに、普通の人の何倍も独占欲が強いのだ。だから、例え玩具であっても康生以外知らない場所を明け渡すようなことはしない。

「あっ……………」

ふしゅ、と空気の漏れる音が聞こえると共に、お腹の圧迫感が小さくなっていく。

「ああ……………」

しゅるしゅるとデイルドが縮んでいく。お腹の中が寂しい。でも、これをしてもらわなければ自分が苦しむことになる。

「抜きますよ」

「んっ……………はい」

アナルのふちを押さえながら、康生が細くなったデイルドをゆっくりと引き抜いた——体内に、コンドームだけを残して。

「ああ……………」

どんなに細いものでも、ずるっとアナルを擦る感覚は気持ちいい。思わず身震いすると康生がくすりと笑った。

「もう限界ですね」

「は、いつ……………もうっ」

アナルもペニスも、乳首にだって刺激がほしい。今はそのどこか一か所だけでも念入りに擦られれば、きつと簡単に射精してしまうだろう。

「全員を回ってください」

「……………はい……………」

「ちゃんと起きて待ってますから」

命じているのは康生だというのに、送り出すときは必ず苦しそうな顔をする。それはなぜなのだろうといつも不思議に思うのだけれど、今まで一度も訊けずにいた。

（康生くん……………）

大人ぶろうとしなくていい。無理に合わせようとしなくていい。でも、康生には康生の考えもプライドもあると分かっているから。

差し出された袋の中には、バスタオルと使い慣れた漏斗。漏斗はコンドームを傷付けないシリコン製だ。このセットを渡されるときの胸中は複雑だけれど、でも——。

「康生くん、待ってて。ちゃんと……たくさんもらってくるから」

「はい。……行つてらっしゃい」

途中、康生が何かを言いかけた。これだっていつものことだ。恐らく「つらくなったら戻ってきていい」とでも言おうと思つているのだろう。でもそれを言われたことは一度もない。言いかけながらも言わないということは、言わないだけの理由があるのだ。だから和紗からも訊くこともない。

「……はい、行つてきます」

遠距離恋愛中の恋人が帰路に着くときのように抱き合い、深く唇を重ねる。くちゅ、といういやらしい音を聞きながら、これからの時間に思いをはせる。

(ああ……もう……)

早くローションをもらつてこなければ。そして康生といやらしいことをしたい。どんなにたくさんローションをもらおうとこの身体は康生のもので、康生だけを愛しているのだと伝えたい。言葉で伝わらなかつたとしても、身体で、行為で、伝わるまで伝え続けたい。

(……もう行かなきゃ……)

そろそろ行かないと遅くなつてしまう。みんな恐らく、今から和紗が訪ねてくることを知つているはずだ。待たせるのは申し訳ないし、眠くなつてしまう者もいるだろう。

そう思いながらもやはり康生と離れるのは名残惜しくて。そしてこれからの数時間、康生がこの部屋で一人、どんな気持ちで帰りを待つのかと思うと――。

「じゃあ……行つてきます」

もう一度、今度は触れ合わせるだけのキスをしてから部屋を出る。パタン、という音が広い廊下に響き、自分一人、裸でいることに急に心細くなる。

(……早く戻るう……)

廊下で誰かに会うことはある。でも、そうしたら部屋を尋ねる手間が省けることになるだけだ。

(……頑張る)

康生のため。二人のため。それにきつと、他の使用人たちのスパイスでもある。

両手で頬をパンと叩き、気を引き締めて一つ目の部屋に向かった。

――コンコン。

「……はい……」

最初に尋ねた部屋は大樹と香澄の部屋。応答してくれたのは香澄で、そして香澄もまた、全裸だった。

「あの、ローションをいただきに……」

「どうぞ」

「いらっしゃい」

堂々と迎え入れてくれた二人。この二人も、とてもよいパートナー関係だと思つている。

「ローション、お願いします」

床を汚さぬよう持参したバスタオルを敷き、その上に四つん這いになってお尻を上げる。そして手探りでアナルに入ったままのコンドームにシリコンの漏斗を挿入すれば、これでもう、和紗の準備は整った。

「……すごいえっち」

「香澄、ほら。急がないと」

二人がすぐ後ろに立ったのが、正面の鏡越しに見えた。

(すごい……)

和紗の真後ろに立った香澄を、大樹が後ろから抱きしめるようにして両乳首に触れている。

「あん……」

「和紗くん、今日香澄は乳首だけでローションを出すので」

「はい……」

和紗にとつて、大樹も香澄も先輩であり上司のような存在だ。だから例え公認のプレイであっても、何かをいただくのは申し訳ない。

「ゆつくりでかまいません……どうか、僕の射精のためにローションを……」

目をぎゅつと瞑ると、このプレイをすることになったときの様子が頭の中に思い浮かんだ。

『和紗さん、物足りないんじゃないですか』

『え？』

『……これからは、ローションを集めてくることにしましょう』

『康生くん……？』

最初こそ、康生が何を考えているのか分からなかった。康生とのセックスは過去経験したことがないほど気持ち良くて、何より精神的にも満たされていた。だから戸惑った、というのが正直なところだったのだけれど、「アナルの貸出」という仕事をしていた以上、そういう趣味だと思われていても不思議ではなくて。いや、確かに趣味だった。色んな人や動物にアナルを物のように使われたかった。そしてそれを生業として生活していた。でもだからといって恋人がいる状態で不特定多数に使われ続けたいと思っていただけではなくて。だからこそ、二人で退職を決めて旦那様に拾っていただいたのだけれど――。

『お尻に漏斗を挿して、そこにみんなの精液をもらってきてください。もちろんコンドームは入れておきますし、直接の挿入は不可。このいやらしいアナルでたくさんさんの精液を溜め込んで、そして部屋に持ち帰って来てください』

『っ……精液、を……？』

『はい。これから、和紗さんがおちんちんを擦るときはそのローションを必須ということにします。おちんちんなしで、ただアナルを使ってセックスするだけならかまいません。でももし、おちんちんを弄りたくなったらそのためだけに、みんなから精液をもらってきてください』

それはとても——とても、何とも形容しがたい発想だった。いや、決め事だった。だってとても興奮した。けれどそれを悦ぶことも、嫌だと表すこともできなくて。ただ戸惑っている和紗を、康生はきつく抱きしめた。

『和紗さん、愛してます。いつか、和紗さんのアナルを貸し出すときが来るかもしれません。でも今は俺だけのアナルでいてください』

それが譲歩だったのか、それとも布石だったのかは今でも分からない。でも少なくとも数年経った今でもラブラブだ、という自信だけはあった。

「はあんっ」

「香澄、乳首が硬いよ」

「やあっ」

背後では恋人たちがいやらしい行為をしている。でも自分は——性器化したアナルに器具を突き挿し、そこに愛の結晶が注がれるのを待っているだけ。

「ほら、見て。和紗くんが香澄のいやらしいお漏らしを待ってるよ」

「ああっ！」

香澄はとても苦しそうに喘いだ。実際に相当苦しいだろうと思う。だって乳首だけで射精するなんて。しかも香澄からすれば和紗は目下なのだ。でももうこの行為だって数え切れないほどしてきている。なのに一向に慣れない様子なのは、和紗から見ても好ましかった。

「香澄さん、乳首気持ち良さそう……」

思わず本音を漏らすと、香澄が目を開けて驚いた顔を見せた。

「ああっ！ やあっ！ 見ないでっ……」

「見てもらわないとダメだよ。香澄がどんな風感じて、どんな風にお漏らししたのかを知っててもらわないと。それを意識しながら、ローションを使ってもらうんだよ」

その言葉は和紗の身体にも影響を与えた。そうだ、こうして香澄の快感故の苦痛——逆だろるか——の上でいただいた精液をローションとしてペニスに塗りたい、康生が見ている前で弄るのだ。そして吐き出した精液はみんなの精液と混ざり合っ——。

「あっ、あっ、おっぱいきもちっ」

「香澄、可愛い。ほら、大好きな乳頭カリカリしようね」

「あっ、あっ」

背後からの両乳首責め。和紗も同じことを何度も康生にされたことがあるけれど、あれは本当に気持ちいい。でもやはり簡単に射精に繋がるような刺激ではないので、感じれば感じるほど苦しくなるのだ。それがまた、とにかく気持ち良くて。

「あっ、あっ」

「くら」

恐らく無意識だろう。香澄の手がペニスに伸びた。けれどそれはすぐ、大樹によって止められてしまう。いやいや、と首を振る様子が我を失っているようでまた可愛くて。

(すごいえっち……)

可愛らしくてえっちで、大樹が夢中になるのもよく分かる。

「ああっ！ やだあっ！ おちんちんっらいっ！」

「うん……でも香澄、和紗くんはずっとおちんちん触ってないんだよ？ 今回は二か月ぶりだって。今ようやくおちんちん弄らせてもらうためにローションを頑張って集めてるのに、

その前で香澄がおちんちんしこしこして気持ちよくなっちゃうの？」

「ううっ……」

「っ……痛い……」

恐らく大樹は、香澄だけを虐めるために言ったのではなかった。今の発言は確実に和紗をも追い詰めるための発言だった。それに、まさか大樹が和紗の性事情について知っていると。

（いや、きっとみんな知ってるんだろぅな……）

康生がみんなにローションの協力を依頼する際に、きっと詳細も伝えているのだ。最後にペニスを扱いたのはいつか、それからどれほどつらい我慢を強いられてきたのか、そしてどんな風にローションを活用するのか――。

「やだあつ、でもおちんちんしこししたいっ」

約3万字です。

よろしくお願いいたします！

戸惑いの花嫁 スピンオフ～康生×和紗

gooneone (一わんわん)

2020/9/21

メール: gooneonegooneone@gmail.com

pixiv: 19591291

Twitter: @gooneone11

LINE: gooneone

